実践報告

小学校通常学級における居場所作りに関する実践的研究

藤澤　真規子（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）
吉田　ゆり（長崎大学大学院教育学研究科）
内野　成美（長崎大学大学院教育学研究科）

１　実践研究の背景と目的

近年、様々な配慮を要する児童への対応が重要視されている。様々な要因により、子ども同士のコミュニケーションがうまく図れず関係が作れなかったり、学習や発達のつまずきがある児童が増えたりしていることが指摘されている。一方で、特別支援教育の理解が進んだことや世界の動向からインクルーシブ教育システムが取り入れられ、配慮をすることの大切さの認識が広がってきている。しかし、教室では担任一人で抱えきれない様々な困り感を持つ児童が増えてきているのが現状である。児童一人一人が自己実現でき、学級に居場所があることで、児童の自己肯定感やコミュニケーション力が向上し、学校生活だけでなく、子どもの人生を豊かにする学級づくりが求められている。

桜井・佐藤（2013）は、“自己実現”とは、「自己の内的欲求や本来の自分の姿を見出し、それを実現していくこと」と述べた。すなわち、個々が自分の思いを、自由に伝えあい、それを互いに折り合いをつけながら認め合うことである。また、“心の居場所“とは、河村（2007）は、「安心感とあたたかいふれあいの中で互いに高めあい自己を確立していくことができる集団」で、それを「教育力のある集団」と述べている。これらに基づき、本実践研究の操作的定義として、“心の居場所”とは、配慮を要する児童も他児童も安心して過ごせ、高めあいながら自分を成長させることができる居心地のいい学級であることが“心の居場所”であり、それを担任が物的環境も人的環境も整え実践している状況と考え、研究の柱にすえる。

また、新学習指導要領の総則には、「個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」と示されており、特別活動編には、視点として「人間関係形成」、目標の一つには「互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」とある。細かい内容の中にも「多様な他者と協働する」や「合意形成を図ったり、意思決定したり」や「生活及び人間関係をよりよく形成する」などがあり、これらのことから、個性を尊重し、様々な人とのコミュニケーション力を高める教育が求められていると考えられる。また、村田・松﨑（2008）らは、配慮を要する児童への支援と学級全体への「包括的な学級支援」が必要だと述べている。配慮を要する児童や学級全体でソーシャルスキルが身につけば、個々の自己肯定感が高まり、生活がスムーズになっていき、学校生活全体が充実してくると、さらに自己肯定感が高まっていくと思われる。

本研究デザインは、①実態把握②配慮方法の検討③実践④考察の PDCA サイクルを機能させることである。

本研究は、全ての子どもの居場所づくりを目的として、包括的な学級支援の実践研究を行う。方法としては、研究デザインの PDCA サイクルに従い、アセスメントの上で、学級全体の支援（クラスワイド支援）として、居場所づくりのプログラムを構成し、実施する。また、配慮の必要な児童の個別支援を行う。

２　実践研究の方法

（１）研究協力校・学年

長崎県 A 市内 B 小学校　第３学年

（２）期　間

２０１９年５月～１１月

（３）研究協力学級

第 3 学年 C 組（男子９名、女子４名　計 13 名）

（４）研究協力児童

第 3 学年 C 組（男子児童，T 児と K 児）

（５）アセスメント

①配慮を要する児童のアセスメント

配慮を要する児童には、学級での行動、他児童との関わり、集会や行事での行動を観察した。また、前担任に聞き取りを行った。さらに、チェックリスト（『発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」行動と学習に関する基礎知識』）と WISC-Ⅳを実施し、就学前に行った検査情報（新版 K 式発達検査、JMAP（日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査、言語評価）と現在の比較を行った。「発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」行動と学習に関する基礎知識とは、臨床心理士の黒澤礼子が作成したもので、記入式シートに、教師や保護者がチェックし、子供の特性を正確に把握して、具体的な対応策を考え、適切な支援がうけられるようにすることを目的としている。

②学級の実態についてのアセスメント

学級としては、学級全体を授業中、休み時間観察をしたり、「目標スキルの自己評定尺度」のアンケート、Q-U アンケート（プレポスト形式）を実施した。Q-U アンケートとは、河村茂雄監修のもと作られた、子供たちの学校生活における満足度と意欲、更に学級集団の状態を調べることができる質問紙である。観察だけでは気づけない部分や教師の観察と子どもの実態のズレを補うもので、不登校やいじめ、意欲の低下などを発見し早期対応したり、集団の傾向をタイプ別に把握したりするもので、その結果から、指導内容の見直しや問題解決に向けて学級経営や授業改善することができる。ここでは、学級集団と配慮を要する児童の状態を知り、早期対応するためのプログラム作りを目的として実施した。実施は、プレ-ポストテスト方式を採用し、実践前の５月と実践後の１１月とした。

○研究協力児童の実態

「観察」から、学級全体としての印象は、発送がユニークで、意欲や理解力があり、学力的に高い児童が多い。生活面でも、互いに注意しあい、その注意を受け入れられる。男女仲が良い。しかし、忘れ物が多かったり、ルールを守れなかったり、女子同士のトラブルが見られた。配慮を要する児童Kさんは、学力的に高く、自学をしてくるし、授業中の発表も多い。嫌なことがあると言いに来る。学級遊びは参加できている。T さんと仲が良い。しかし。行動が他児童よりワンテンポ遅れぎみで、指示が通らない。忘れ物が多く、身の回りの片付けが苦手である。Tさんは、授業中の発表多く、アイデアが豊富で、コツコツ取り組む。しかし、自分の世界に入り、手が進んでいない時がある。学級遊びはできるが、昼休み一人で本を読んでいることがある。友だちが困っていると助けることができる。Kさんと仲が良い。しかし、忘れ物が多い。

○学級全体のQ-Uのプレテスト結果

＜全体＞

（やる気のあるクラスをつくるためのアンケート結果）

・友だち関係９．７（９・８）　・学習意欲９・９（９．９）　・学級の雰囲気１０・９（１０．３）

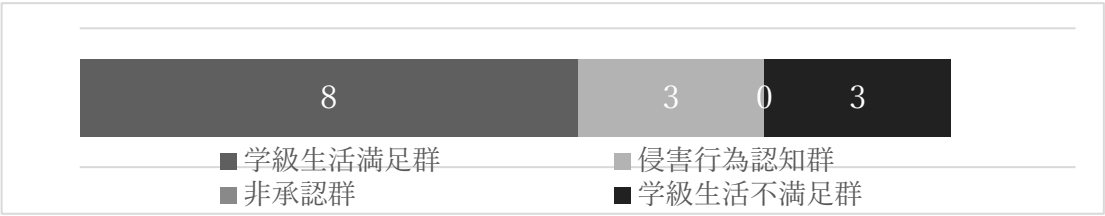


図１　Q-Uいごこちのよいクラスにするアンケート結果

【考察】

友だち関係に不安を持っている児童がいる。また、被侵害得点が高く承認得点が低い児童への改善を向けたプログラム（ルールとリレーション作り）を実施していく必要がある。

＜配慮を要する児童＞

表１　やる気のあるクラスをつくるためのアンケート

	友だち関係	学習意欲	学級の雰囲気	計
Tさん	9	10	12	31
Kさん	6	8	9	23

表２　いごこちのよいクラスにするためのアンケート

Tさん	学級生活満足群
Kさん	学級生活不満足群

『「発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」行動と学習に関する基礎知識』

「行動と学習に関する基礎知識」を、配慮を要する児童２名分、担任が行い、それぞれの長所と短所を考察した。その考察から、配慮を要する児童への個別のSST案を考えた。

（Tさん）

長所･･･対人関係・社会性、興味とこだわり、多動性、衝動性、認知・推論、読む、数・計算、情動

短所･･･不注意、聞く、話す、運動

（Kさん）

長所･･･対人関係・社会性、認知・推論、読む、書く、数・計算、情動

短所･･･不注意、多動性、聞く、話す、衝動性、運動

↓↓

（二人）･･･「不注意」と「聞く・話す」と「運動」に対するアプローチが必要

表３　配慮が必要な２名の児童へのアプローチ内容案

種　　類	内　　容
聞く・話す	聞く･･･おちたおちた、聞く聞くゲーム、テレパシーゲーム 話す･･･「こんな時どう言うの」ゲーム
不注意	確かめ写真カードと家庭へのお願い、言葉での説明
粗大運動	サーキッド、トランポリン

３　実践研究の内容

（１）プログラム内容

【学級全体】

①アプローチ

表４　SST＋SGEを組み合わせたアプローチの計画・実践内容

月　日	内　容
５月２１日（火）	ふわふわ言葉ちくちく言葉
６月２７日（木）	どんな気持ちかな？
７月２日(火)	いいとこ探し
９月３日（火）	さいころトーキング
９月３日（火）	確かめ写真カードと家庭へのお願い、言葉での説明（全体→詳細）
９月１０日（火）	「バースディーチェーン」、「あなたの好きな物は？あなたの得意なことは？」「私の好きな季節・教科・テレビ番組」
９月１８日（水）	なんでもバスケット
９月２４日（火）	みんなのために私のために

表５　アプローチの具体的内容

Ⅰ　ふわふわ言葉ちくちく言葉	
目的	言葉でのトラブルがあったり、気持ちのすれ違いがあったりしたので、自分が発する言葉の重要性に気付き、相手のことを考えた言葉遣いができるような態度を養う。
方法	１　「ちくちく言葉」を考え、発表する。 ２　言ってみる。 ３　どんな気持ちがしたか話し合う。 ４　「ふわふわ言葉」を考え、発表する。 ５　言ってみる。 ６　どんな気持ちがしたか話し合う。 ７　どちらの言葉を使った方がいいか話し合う。 ８　感想を書く。
Ⅱ　どんな気持ちかな	
目的	強い口調で人に注意したり、何度も注意したりする児童が多いので、相手の気持ちを考えて行動する態度を養う。
方法	１　プラスの気持ち、マイナスの気持ちについて考える。 ２　色々な場面で、どんな気持ちになるか考え、ペアで話し合った後、全体で発表する。 ３　気持ちを交流しての感想を書き、数名発表する。 ４　クラスの「よいところ」「もうひとがんばり」「満足度」「先生へのお願い」を書き、発表する。 ５　「もうひとがんばり」の中から３つ、クラスのルールを決める。 ６　５日間、チャレンジし、プリントに日々振り返る。 ＜決まったルール＞・注意は１回　　・忘れ物を減らす。　　・やさしくする。
Ⅲ　いいとこ探し	
目的	自分のいいところを友だちから探してもらうことで、自己肯定感を高めたり、友だちの良いところを見つけ認めようとしたりする態度を養う。
方法	１　活動内容（席の知覚の児童の良いところを探してカードに書き、渡す。もらったカードを読み、自分の良いところに気付く）を知る。 ２　周囲の児童の良いところや頑張っているところを書く。 ３　切って渡す。 ４　もらったカードを読む。 ５　振り返りカードを書く。

Ⅳ　さいころトーク	
目的	気持ちのいい聞き方を知り、話しを聞くときどのような態度をとったらいいか考え、実践しようとする態度を養う。
方法	１　３～４人、一グループになる。 ２　順番でサイコロを振る。 ３　出ための数のお題を一人ずつ話す。 ４　質問や感想を言う。 ５　まとめる。 ６　振り返りカードを記入する。
Ⅴ　いろいろゲーム･･･誕生日チェーン、すきな物、すきなテレビ番組、好きな教科、得意なこと等	
目的	様々なゲームをして、友達の知らなかった考えに触れ、他者について理解を深める。
方法	１　誕生日チェーンで円になる。 ２　お題ごとに、隣の人に質問する。隣の人は答える。

	3　まとめる。 4　振り返りカードを記入する。
Ⅵ　なんでもバスケット	
目的	友達のことを考えながらお題を出し、友達の事を知ろうとする態度を養う。また、席を移動するとき、ルールを守ったり相手の行動を考えたりすることにより、コミュニケーション力を養う。
方法	＜ルール＞ ・友達の嫌なことを言わない。　・２つ以上離れたところに座る。　・わざと負けない。 1　円になる。 2　真ん中に来た人がお題を出す。 3　当てはまる人は席を替わる。 4　席に座れなかった人は真ん中でお題を出す。 5　振り返りカードを記入する。
Ⅶ　プレイバック会議	
目的	喧嘩をしないようにするために、また、喧嘩をしたときどのような態度をとったらいいか考え、実践しようとする態度を養う。
方法	1　こんきちとポン太の話しを聞く。 2　喧嘩をしたときのロールプレイをし、気持ちを考える。 3　喧嘩しないときのロールプレイをし、気持ちを考える。 4　友達と接するとき、どんなことに気を付けたらいいか考え、話し合う。 5　まとめる。 6　振り返りカードを記入する。

②身体アプローチ（体づくり）

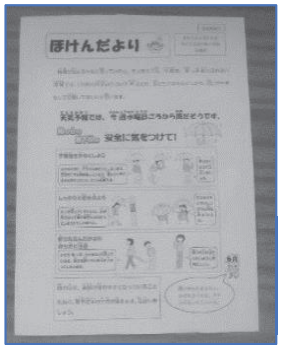
感覚統合の考え方から、トランポリン、アスレチック等の粗大運動に取り組んだ。

【個別支援】

③UD（ユニバーサルデザイン）

場の構造化　「席替え」「グループ分け」

視覚化「確かめ写真カード」



ハンカチ　　ちり紙

名ふだ　　プリント

④SST

表６　　個別 SST の実施予定と結果

月　　日	内　　容	結　　果
９月２６日（木）	「ソーシャルスキルカルタ」①	・スキルの内容を理解できた。
９月３１日（月）	「ソーシャルスキルカルタ」②	・言い方の理解が進んだ。
11月１８日（月）	「ソーシャルスキルカルタ」③	・使用する場面が見られた。

４　結果及び考察

（１）実践結果

①アプローチ結果

アプローチを実践した結果としては、どのアプローチも楽しく活動できていた。配慮を要する児童 T さんは、２回目の「どんな気持ちかな？」が２点、K さんは１回目の「ふわふわ言葉ちくちく言葉」、７回目の「みんなのために私のために」が２点だった。他は３点だった。女子は全員３点満点だった。2 点を付けている児童に何故 2 点だったか聞いてみると、内容を理解できていなかった。また、体を動かすゲーム的なアプローチは、全員満点だった。

＜アプローチ実施　学級全体の満足度＞

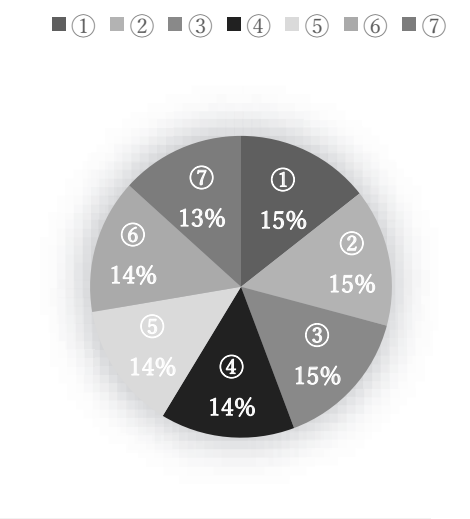


図２　アプローチ満足度

左の図２のグラフは、7 回実施したアプローチの満足度を円グラフにしたものである。アプローチ実施後、感想用紙に「うれしかった」「ふつう」「うれしくなかった」の 3 段階のどれかに〇をつけてもらい、それを統計した。

図３のグラフより、どの回も、「満足度」は高い児童が多い。実施ごとに、13％～15％と満足度が高くなった。このことから、数名を除いて、内容について理解し、楽しく取り組めたと考えられる。また、実施内容も児童の実態に合ったもので、取り組みやすかったと考えられる。事前に実態をしっかり把握し、内容を精選した結果と思われる。

＜アプローチ実施　個人の満足度＞

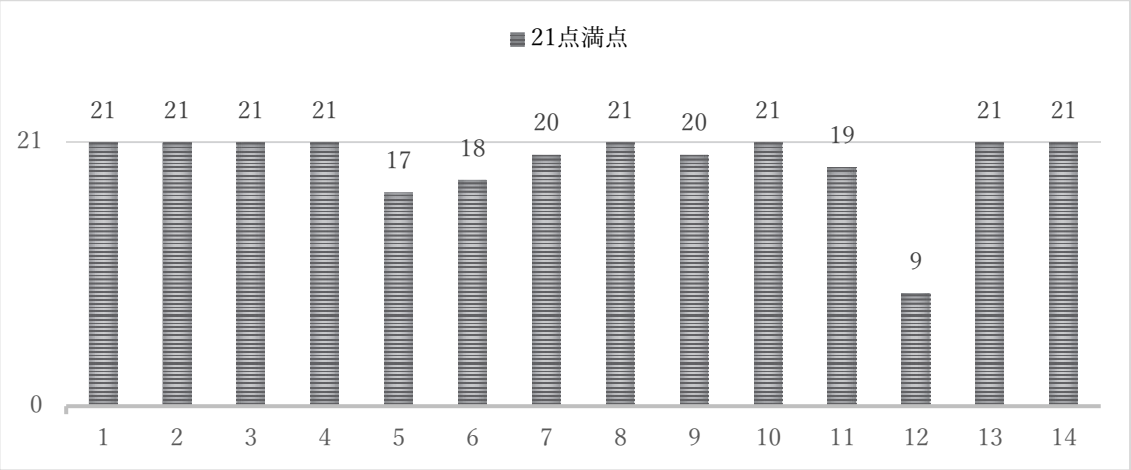


図３　アプローチ　個人満足度

表７　　児童の感想

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
足が速いねって言われたい。	手紙をもらって嬉しかった。	忘れ物をちゃんと減らします。	聞き方が上手になりたいです。	友達の好きなことが分かってよかった。	みんないろんなことが好きなんだなと思いました。	島根県の挨拶が「だんだん」とは知りませんでした。
ふわふわ言葉を増やしたい。	欠席	ばっちりできていたから、ずっと続けます。	うなずきながら聞けるようになりたい。	好きな物がみんな違うからびっくりした。	甘い物が嫌いな人がいたいからびっくり。スケボーを持っていた人がいたから驚いた。	誰にでも優しい言葉を使います。
良い言葉を使って褒めたい。	嬉しくなった。知らないことも書いていて嬉しかった。	悪い言葉を使いません、	よそ見や手いたずらしないようにがんばります。	話しを聞いてくれたから嬉しかった。	みんなと一緒に話をしたり、みんなの好きな物とかが分かりました。	けんかをしないようにします。
使って良い言葉が分かった。	いいところを見付けてくれているんだなあと思った。	悪い言葉は使わず、良い言葉を使いたいです。	質問をいっぱい言いたいです。	みんなの好きな物とかが知れて嬉しかった。	楽しくて、いとことしたいなあと思いました。	仲直りして欲しい。
ちくちく言葉は使わない。	たくさんもらえて嬉しかった。足早いと言われて嬉しかった。	注意を何回もしたから、今度からは気を付ける。	よそ見しないで相手を見て話しを聞く。	好きなことなどを教えてくれたので嬉しかった。	とても楽しかったし、友達や自分の好きな物を言えたし分かったからよかったです。	喧嘩をしないために、人の傷つく言葉は言わないで、綺麗な言葉を使います。
ふわふわ言葉を言おうと思った。	面白いと思っていなかったけど、そんなに面白いなら笑わせようと思った。嬉しかった。	忘れ物が多かったから、今度から減らします。	話しの聞き方「あいうえお」を頑張ろうと思いました。	みんなの好きなことが伝わりました。	みんなのことがまたいっぱい知れて、みんなの好みがよく分かりました。	つい喧嘩してしまうときがあります。だから、みんなに「ごめんね。」という気持ちが溢れました。
ふわふわ言葉を増やそうと思った。	みんな、いいところを探すのが上手。	注意を１回にしたり、悪い言葉を減らす。	黙って聞くことを頑張ります。	みんなのことが分かって楽しかった。	みんなの好きな物が分かって楽しかった。	みんなに「ごめんなさい。」と言います。
ふわふわ言葉で気持ちよくなった。ずっと続けたい。	計算が得意と書いていて嬉しかった。みんなに計算をいっぱい教えたい。	注意を１回に減らします。	質問や感想が言えるように頑張る。	みんなが言ったことをみてみたいなと思いました。	好きな物とかで立ったけどすぐに座ったから、それであてられなかったからよかった。	優しい言葉ふわふわ言葉がいっぱいあったから、それをみんなに教えようと思います。
ふわふわ言葉が多かったので良かった。	いっぱいもらって嬉しかった。	忘れ物をなくしたいです。	これからは相槌をうって聞きます。	みんなの好きなことが分かって楽しかったです。	ゲームが混ざっていて楽しかったです。	これからも喧嘩したらごめんなさいって言います。
ふわふわ言葉を使おうと思った。	みんなが私のいいところをよく見ているんだなと思った。	このチャレンジをして、みんな悪口や注意が減ったと思います。忘れ物が減らないので気を付けたい。	話しが終わるまでしっかりと聞いて質問とか最後にしたいです。	みんなの特技などが聞けたから楽しかった。	みんなの好きなことがたくさんあって楽しかったしたくさんいろんなことができて楽しかった。	今までちくちく言葉や人が嫌がることを言っていたから、次からはふわふわ言葉をたくさん使ってみんなと仲良くなります。
ふわふわ言葉を言った方が良いと思った。	いいことを書いてくれていたから嬉しかった。	忘れ物を減らしたい。	話が終わるまで質問をしない。	みんなの好きな物が分かって、お土産などが探しやすくなって嬉しかったです。	とても楽しいゲームで、みんなが好きなことを教えてくれて、とても楽しかったです。	劇が楽しくて、豆知識も知れて嬉しかったです。
ふわふわ言葉をいっぱい使いたい。	よろしくねって言ってくれて嬉しかった。	転出				
ふわふわ言葉を増やしていきたい。	読んで嬉しかった。	悪い言葉を使ったので、今度から守りたいです。	相槌をうつことを頑張りたい。	友達の好きな物にこんな物があったのかって分かった。	友達は意外な物が好きなことを知りました。	喧嘩していたら「ごめんね。」「大丈夫。」を言ってあげたら喧嘩にならないと思います。
悪い言葉を使うと人が嫌な気持ちになるからふわふわ言葉をたくさん使いたい。	いっぱいいいところを書いていたから嬉しかった。	忘れ物を２学期はしない。	話をしている人に体を向けて聞きたい。	前は友達の好きな物が分からなかったので、ゲームをしてよかったです。	前のゲームで分かったことがあったけど、またいろいろ分かったので、してよかったです。	友達と喧嘩したら、嫌な言葉じゃなくて優しい言葉を使います。

②身体アプローチ（体つくり）

身体アプローチ（体づくり）を行い、刺激の調整や情緒の安定等に繋がっていくことをねらい、トランポリンやサーキッド等の粗大運動を行い、①運動能力の向上が見られる②落ち着いて行動できたりコミュニケーション力の向上をはかった。

＜身体アプローチ（体づくり）の評価内容と評価場面＞

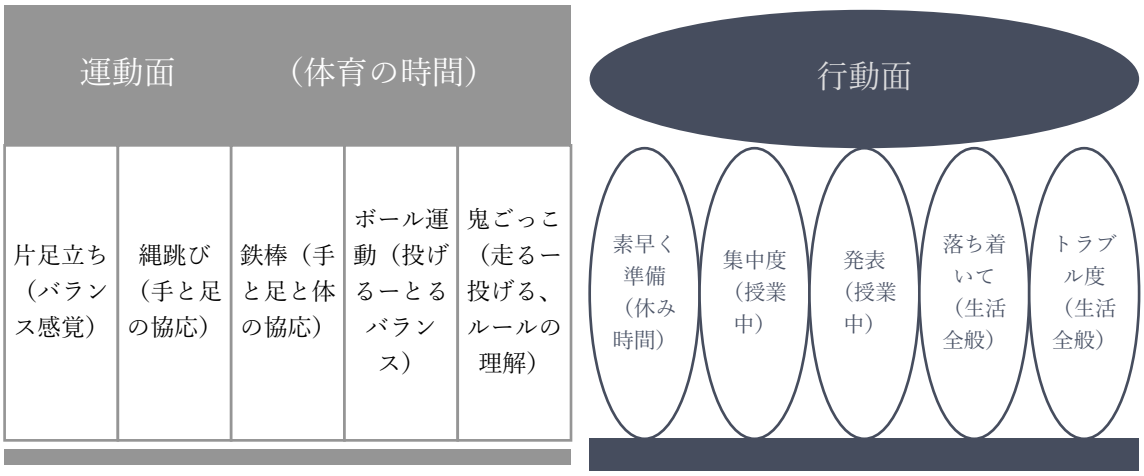


図４　運動面、行動面での評価と場面

＜配慮を要する児童の運動面での変容＞

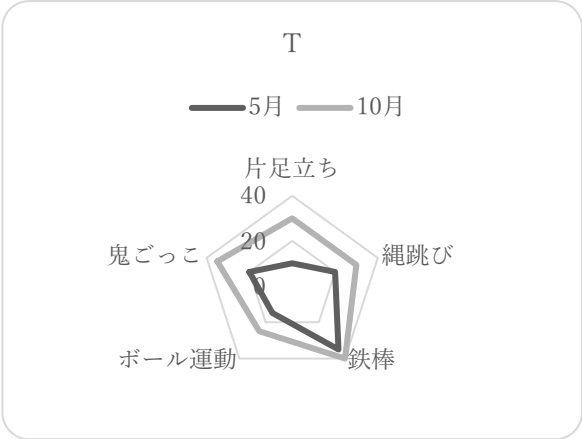


図５　Ｔさんの運動面での変容

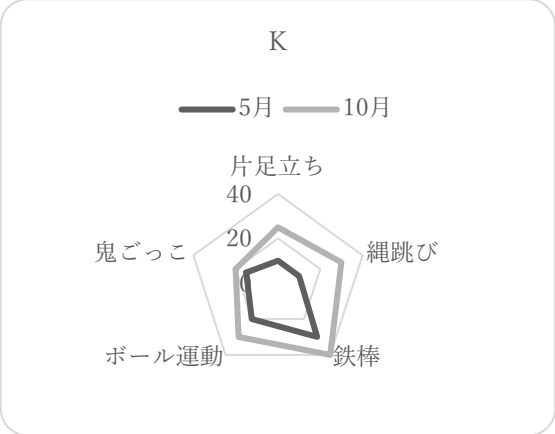


図６　Ｋさんの運動面での変容

＜配慮を要する児童の行動面での変容＞

１：できない２：少しできる３：できる

表８　Ｔさんの行動面での変容

Ｔさん	４月	７月	11月
学習の準備を素早くする。	1	1	2
授業中の集中度。	1	1	2
授業中の発表。	1	2	3
落ち着いて物事に取り組む。	1	1	2
友だちとのトラブル度。	1	1	2

表９　Ｋさんの行動面での変容

Ｋさん	４月	７月	11月
学習の準備を素早くする。	1	2	2
授業中の集中度。	2	2	3
授業中の発表。	3	3	3
落ち着いて物事に取り組む。	1	2	2
友だちとのトラブル度。	1	2	3

トランポリンやサーキッド等の粗大運動を取り入れたことにより、落ち着いて行動できることが増えてきた。これらのことから、トランポリンやサーキッド等の粗大運動を行うことは、覚醒を促したり、気分を落ち着けたりする上で大切なことだと考えられる。

③　Q-U アンケートのプレポスト結果比較

図７　やる気のあるクラスをつくるためのアンケート比較結果

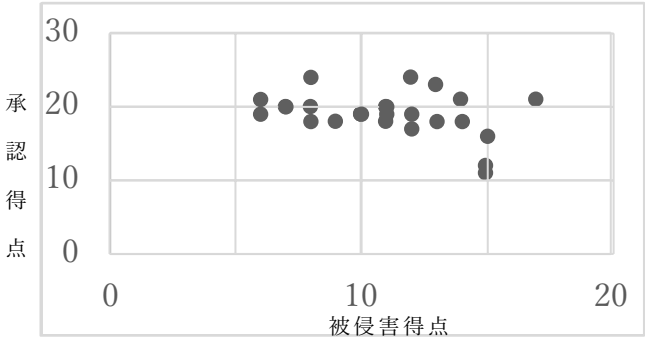
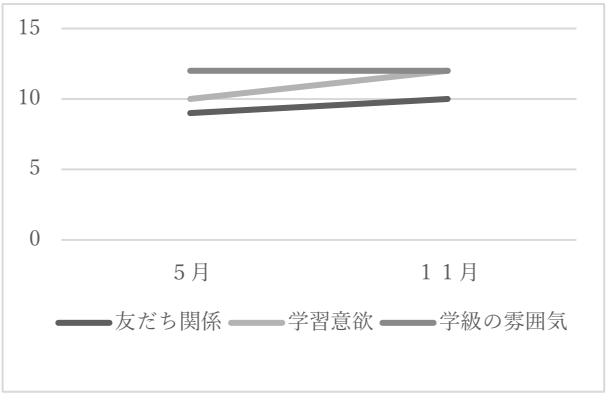


図８　承認得点と被侵害得点
5 月と 11 月比較

〇図７より、学級全体としては、どの項目も伸びている。このことから、様々なアプローチを行うことによって、他者との関係づくりが分かり、クラスの雰囲気が良くなって、友達とのかかわりがスムーズになってきていることが分かる。また、図８では、承認得点が高くなり、被侵害得点が低くなっている。自分が認められていると感じている児童が増えていることが分かる。

〇配慮を要する児童は以下の通りとなった。



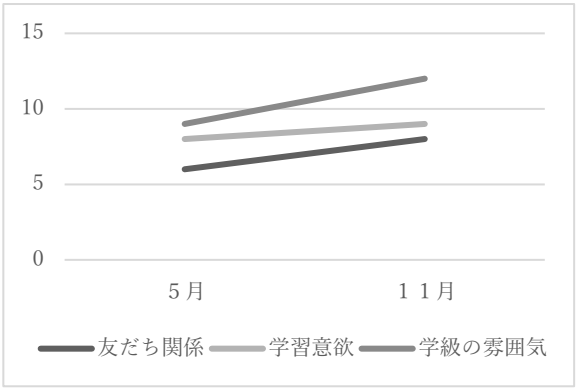


図９　やる気のあるクラスをつくるためのアンケート比較結果

図９から、T さんの「学級の雰囲気」は変わらないが、二人ともどの項目も数値が高くなっている。プログラムにより、他者から認められ、自分に自信がつき、友だち関係が改善したり学習意欲が高まったりしている。また、友だちとのやりとりの仕方を知り、他児童と楽しくかかわれることができるようになってきており、学級の雰囲気がいいと感じているものと思われる。T さんは、5 月のアンケートを取った時点から、学級の雰囲気はいいと感じていて、今回も同じ結果という

ことは、配慮を要する児童も適切な環境のもとであると楽しく過ごすことができていると思われる。

○いごこちのよいクラスにするためのアンケート比較結果は次の通りでる。

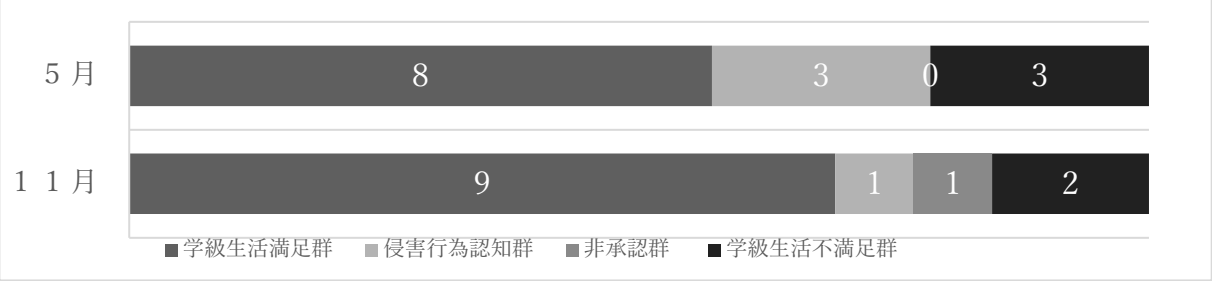


図１０　いごこちのよいクラスにするためのアンケート比較結果

図 10 から、学級生活満足群、侵害行為認知群、学級生活不満足群は良くなっており、アプローチの効果が認められる。

○配慮を要する児童の Q-U アンケート比較結果は次のとおりである。

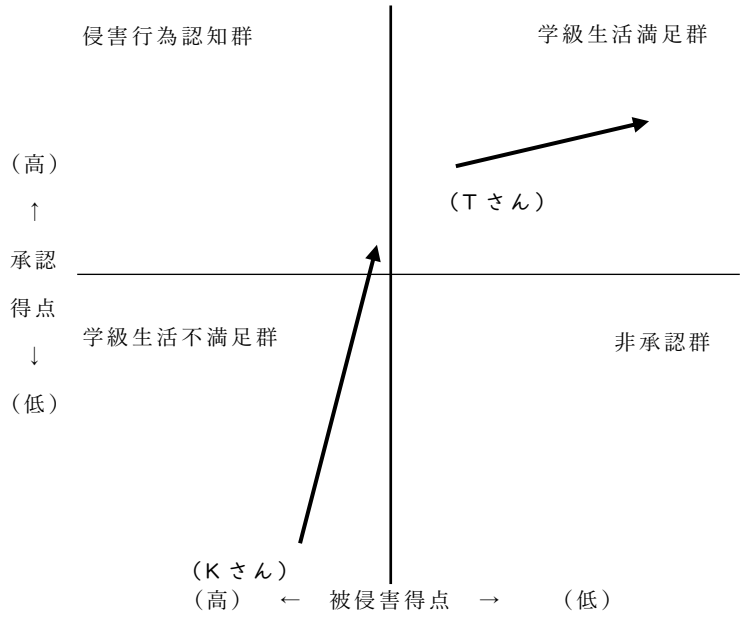


図 11　Q-U　アンケート結果の比較

配慮を要する児童 T さんは、学級生活満足群で、承認得点が高くなり、被侵害得点が低くなっている。学級全体でのプログラムと個別の SST を組み合わせることにより、学級に自分の居場所を見つけ、他児童との良好な関係ができ、認められることによって、自己肯定感が上がったと考えられる。K さんは、学級生活不満足群から侵害行為認知群となった。学級への不満は少なくなったものの、自分のことを認めてもらえないと感じていることが伺える。しかし、承

認得点も高くなり、被侵害得点が低くなっている点から、自己認知や他者認知が進み、学級に居場所は感じられるようになってきていると思われる。

5　総合的考察

本実践研究では、通常学級に在籍する全ての児童が、自己肯定感を高め、学校生活を満足して過ごすために、アセスメントによる実態把握を行った後、包括的な学級支援として、居場所づくりのためのプログラムを検討・実践し、学級づくりに有効な方法であるか検証することを目的としたものである。学級に合うプログラムを計画するためには、学級全体と個別を、様々な方法で把握する必要があることを再確認した。また、クラスワイド支援としては、居場所づくりのプログラムと身体アプローチ、個別支援としては、ユニバーサルデザインの導入、個別SSTに取り組んだ。その結果、学級全体が落ち着いた雰囲気になったり、児童同士の関りに良い変化をもたらしたりした。また、粗大運動を行うことで、運動面や行動面の向上が見られた。このことから、あらゆる方面から支援を行うことの必要性を実感した。居心地のいい、安心感のある学級づくりのために、児童一人一人に寄り添い、児童の想いを大切にしながら、今後も様々な方法を考え、実践していきたい。

謝辞

本実践研究は、多くの研究協力者のお力添えにより完成することができました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。今後の自己研鑽を念じ、この研究に協力していただいた方々の今後の益々のご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げて謝辞といたします。

文献

氏家享子（2018）発達障碍児へのソーシャルスキルトレーニングに関する実践研究，小集団のメリットを活かしたかかわり，教育・教職センター，特別支援教育研究年報，10，35－50.

江畑慎吾（2019）学級担任の実施による集団社会的スキル訓練の効果，中京学院大学短期大学研究紀要，49，13－18.

櫻井茂雄・佐藤有耕(2013)スタンダード発達心理学，サイエンス社.

堀部要子(2013)小学校におけるクラスワイドソーシャルスキルトレーニングの導入方法の検討，人間発達学研究，9，91－102.

村田朱音・松﨑博文（2008）特別支援児が在籍する通常学級における包括的な学級支援（2)福島大学総合教育センター紀要,6,25－32,

文部科学省(2019)『学習指導要領　総則』東洋館出版社，17－22.

文部科学省(2019)『学習指導要領　特別活動』東洋館出版社，6－17.